



人々の心が包む社会

吉田 結

私は正直に言うとタイについての知識はあまりなかった。微笑みの国、よくそう聞くが実際はどのようなのだろうと、行く前は少し不安さえ感じていた。その中でも 1 番不安だったのは現地の同世代の方々との交流だった。

しかし、現地の学生との交流で恋するフォーチュンクッキーを踊った時、現地の学生たちが歓声とともに立ち上がって一緒に歌ってくれたり踊ってくれたり、私のバディの学生と一緒にタイのお菓子のカノムサイサイをつくった時はもう楽しさと嬉しさで、不安など吹き飛んでいた。

私は発達障害があり、感覚過敏で大きな音や光が苦手だ。カクテルパーティー効果が働かず、自分に必要のない音も全部拾ってしまう為、グループワークでは同じグループの人の声が聞こえない。そして日光のもとでは目が開けられなくなってしまう。しかし、教育支援センターの知的特別支援学校では、私と同じくイヤーマフをつけている子がいると聞き、とても親近感を感じたのだ。私がかけているサングラスを「かっこいいね」と言ってくれたり、通りすがりの人がカタコトの日本語で「こんにちは!」「かわいいね!」と話しかけてくれたり、私のバディの学生が日傘をずっと差してくれたりして、タイでは人々の暖かさを感じた。

そして、訪問した障がい者支援の現場からは、障がいの有無で分けたり、無理に皆と同じ生活を強いるのではなく、様々な人の形を受け入れて包括的な社会にしていけばいいと学んだ。